



品種では、2〜5番目に咲いた4つの花を残し、最初と6番目以降の花は摘み取ります。これにより管理が複雑になり、作業量も数倍に膨れ上がったため、常に作業に追われています。それでも、少しずつ大きくなるイチゴを見ると、収穫が楽しみでなりません。

この広報誌が発行される頃には、初回の収穫を迎えている予定です。また、ハイシーズンには赤や白、桃色のイチゴがきれいに並びと思います。収穫シーズンの到来と村民の皆様にご食べていただく日を楽しみに、今日もハウスでイチゴと向き合っています。



イチゴ栽培 に挑戦

旧芦野小学校グラウンド跡地に新設されたビニールハウスで、葉物野菜やイチゴの栽培を行っています。栽培を通して、人の手と最先端技術による新しい施設園芸栽培の調査研究に挑戦しています。



猿払村地域おこし協力隊
塚田 治幸

イチゴに満ちた日々

5月中旬、芦野のハウスにイチゴを定植してから約2カ月。専門家の指導を受けながら、イチゴの生育を見守ってきました。当初、手のひらに収まる大きさだった苗が、今では立派に生い茂り、白い花をたくさん付けています。中には既にイチゴの形をした実も多くあります。収穫はまだ始まっていませんが、ここまでの道のりはイチゴ栽培の大変さを痛感する日々の連続でした。

苗が到着してから今日まで、害虫との戦いは継続的に行われています。代表的な害虫であるアブラムシやハダニは、葉の裏などの見えにくいところに発生し、短期間で爆発的に

増えるためとても厄介です。特にハダニは体長約0.5ミリと非常に小さく、発見するのは困難ですが、苗に起こる小さな変化を見逃さないように目を凝らして観察し、現在まで大きな被害を受けずに生育できています。

5月に入ると、日々の作業も慌ただしくなりました。当初、すべての苗を同じ生育方法で管理していましたが、収穫が近くなると、良い実を付けるために品種ごとに管理を変えることになりました。例えば、ある品種では最初に咲いた花から3番目に咲いた花まで残し、以降の花を摘み取ります。しかし別の

